

前部門長(第 88 期) 黒田 孝春(木更津高専)

第 89 期も 3 ヶ月近くを過ぎ、梅雨の紫陽花の清楚な美しさが心を和ませる季節も過ぎ、梅雨末期のゲリラ的豪雨が気になるところです。前期を振り返りますと、委員会組織を見直し、審議を主体とする委員会と研究活動や活動を主体とした研究会に整理統合する部門組織の改革の元年でした。結果として、広報委員会、表彰委員会、ロードマップ委員会と機械遺産委員会の4つの委員会と「人機能支援の工学研究会」(継続)、「スターリングエンジン(略称 SE)を活用した工学教育研究会」(新規)、「ブルネル・スピリット研究会」(新規)、「技術教育・工学教育研究会」(新規)の4つの研究会が設置されました。さらに、2011 年度には「技術と社会問題研究会」などの研究会の発足に向けた準備が進められており、今後の年次大会等の研究発表の活性化に期待するところです。



さて、あらためて 1 年間を振り返りますと、部門運営の評価が気にかかるようになりました。

部門の評価関数は何か？です。すなわち、部門としての役割の明確化、あるいは定義が気になりました。残念ながら、この 1 年はシーケンス的に進めるべき行事への対応に追っていたのが現実であり自省の念を抱いているところです。部門の役割ですが、①部門登録者の利益に叶う部門運営をする ②機械学会における当部門の役割を果たす ③社会への役割を果たす の3要素に重み係数を掛けた評価関数を設定してみました。

①の面では、研究発表の機会提供、学習・研修の機会提供や広報・情報提供などでしょうが、研究発表の機会では、残念ながら東日本大震災の影響を受け、関東支部講演会の中止や国際会議 ICBTT2010 の日程の関係で部門講演会を取りやめるなど残念な結果となりました。年次大会や ICBTT2010 の発表件数は順調な推移を示していますが、発表者の固定化の傾向が若干見られました。今後、登録者の増加や若い研究者の参加増に繋げる為にも、魅力ある研修会や情報提供の在り方の検討をしては如何でしょう。

②の面では、2007 年から当部門が候補推薦作業を担当している機械遺産の認定は、2010 年度の6つの認定を含めて、43 件に達しました。中でも 2010 年の認定は、新聞やテレビなどのメディアに多く取り上げられ、話題を集めたことは社会との接点としての役割が果たせたのではないのでしょうか。さらに、部門横断的な活動として進めている交通・物流部門との合同見学による情報交換から、2011 年次大会での合同企画の実施へと連携の活性化が進展しつつありますし、法工学専門会議との連携も継続していることは評価でき

ます。今後は、部門としての独自性を維持しながら、着実な学会内での連携活動の啓蒙と実績を期待します。

③の面では、第1に本部門が誇るイブニングセミナーが挙げられます。10年以上の長期に亘り、ほぼ毎月1回のペースで第88期までに136回も継続されています。継続は力なりを文字通り実践されている担当者の方々に敬意を表します。さらに、年次大会での市民向けのイベント、新☆エネルギーコンテストやスターリングエンジン講習会など市民や未来の機械工学の技術者育成に目を向けた活動も続けられていますが、PR活動が不足している様にも感じられました。

今年の3月11日の東日本大震災は未曾有の甚大な被害をもたらしましたが、大自然の脅威は人類の科学技術への過信と未熟さを痛感させられたのは皆様も同感ではないでしょうか。技術や科学に携わる者として、科学技術は人類の幸福や安全を追求するためにあることは言うまでも無く、世界的にも自然災害の確率が非常に高い日本においては、市民の安全や安心を支えるためにも科学技術の役割は甚大です。残念ながら今回の被害は、科学技術やリスク管理の盲点が招いた人災であった面も否定できません。市民のための科学技術として「安全神話」から脱却し、「機械である以上、必ず事故は発生する」と「想定外の自然災害は発生する」ことを前提とした安全・安心のための科学技術の追求のための部門活動が必要ではないでしょうか。

今後、「技術と社会」を部門名として掲げる当部門は、社会にあるべき学会の姿勢、将来を担うべき人材育成に対する役割は重大であり、このための評価関数を定義すべき時期かもしれません。

今年度は、当部門でのご経験が豊かで頼もしい緒方正則(関西大学)部門長と星朗(一関高専)副部門長にバトンタツトできることとなり、部門の益々の活性化と発展に期待しております。

以上、小職にとっての部門運営は甚だ未熟ではありましたが、部門に関係する皆様からの暖かいご支援とご協力により任期を終えることができましたことに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。